

令和 5 年 6 月 19 日現在

機関番号：32636

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K10617

研究課題名(和文) 高齢難聴患者の対処行動を支援するための患者・看護師への研修の開発

研究課題名(英文) Development of an educational program for patients/nurses to support and improve the coping behavior of the hearing-impaired elderly

研究代表者

森田 恵子 (MORITA, Keiko)

大東文化大学・スポーツ健康科学部・教授

研究者番号：60369345

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、「加齢性難聴に関する理解と対応」に関する研修プログラムを作成し、医療・福祉等に従事する職員に研修を実施し、研修が及ぼす影響を明らかにすることである。文献および海外における難聴対策の視察などから得た知見より、難聴者へのコミュニケーションの工夫尺度(以下、尺度)22項目を抽出した。4回1シリーズの研修会をハイブリッド(オンライン+動画配信)方式で実施し、研修前後の自己の意識や行動の変化について、尺度および自由記述により回答を求め、尺度の22項目中4項目において行動が変化している傾向があることを確認した。研修会は、職員の難聴者対応能力の向上に寄与できる可能性あると考えられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

高齢難聴患者の適応的な対処行動の支援、看護の質の向上のため、高齢入院患者と看護師に対する研修の開発は重要であると考えた。しかし、日本において、公的機関・民間による難聴者への対応に関する研修制度は見あたらない。また、医療職者や難聴高齢者等に対する難聴およびコミュニケーションの理解と対応に関する研修の効果は明らかにされていない。本研究の意義として、研修の開発およびこの研修の効果を明らかにすることにより、看護職を含む医療・福祉従事者の対応の質の向上に貢献できること、また高齢者の医療満足度の向上に繋がると考えた。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study was to elucidate the significance of the program after conducting on healthcare and welfare professionals. Based on the insights gained both from literature review and from on-sight observations of the hearing-impaired interventions abroad, a set of 22 adaptive-communication measures (hereinafter referred to as "measures") were identified for individuals with hearing impairment. A workshop of four-training series was conducted based on a hybrid format (online + video distribution). Participants were asked to respond to specific measures and provide free-text descriptions. Changes were observed in their self-awareness before and after the training. It was confirmed that there was a tendency for behavioral changes in four out of the 22 measures. The training program was believed to have the potential to contribute to the enhancement of staff members' abilities to interact with individuals with hearing impairment.

研究分野：老年看護学

キーワード：加齢性難聴 研修会 医療・福祉従事者 コミュニケーション 行動変化

1. 研究開始当初の背景

加齢性難聴は、内耳以降の加齢変化により生じる感音難聴であり、音は聞こえても言葉の聞きとりが困難となる。老年期の難聴は、高齢者の健康や生活に影響を及ぼし、難聴と抑うつ・社会的孤立とは正の相関があること (Dawes et al, 2015) 近年では難聴が認知機能低下のリスク要因であることが示されている (Lin et al, 2011)。

加齢に伴い難聴の有病率は上昇し、日本における 65 歳以上の難聴者は約 1,500 万人と推計されている (内田ら、2012)。一方、日本における受療率は、65 歳以上の者が入院の 73.2%、外来 50.7% を占め、難聴を有し受療を受ける高齢者は多いものと推察される (厚生省の指標、2021)。全日本難聴者・中途失聴者団体連合会は、大半の難聴者が入院に際して聞こえにくいという不安を持ち、必要以上に気を使っていること等を報告し、受療時の不便さが改善されるように、受診ガイドブックを作成・配布している (全国難聴者失聴者団体、2008)。

研究代表者らは、高齢難聴患者は、「名前」、「褒め言葉」を使用するなど、看護師の注意が高齢難聴患者に向けられていると感じられる会話は理解しやすく、高齢難聴患者自ら【途中で確認できる会話がよい】としていることを報告した。更に、高齢難聴患者は、臥床安静時など自らがとる適応的対処行動を發揮できない場面で困惑し、非適応的対処行動である【仕方がないと諦める】傾向にあることについて 2017 年に報告した。

一方、看護師は診療の補助業務、日常生活援助などの業務の種別に関わらず、高齢難聴患者の聴覚障害による看護する上での困難さを経験していたことを報告した (森田ら、2017)。看護師が高齢難聴患者に実施しているコミュニケーションは、「低い声」など現在推奨されていない方法も含め、多種多様なコミュニケーション方法を用いていること、高齢難聴患者に注意喚起と安心感をもたらすタッチングなどの身体接触などの方法は十分に意識されていないものと推察された。

コミュニケーション研究の分野は多岐にわたり、医療者と患者・利用者とのコミュニケーションは医療コミュニケーション分野に分類され、今後研究されるべき課題が多いことが指摘されている (Northouse et al, 1998、久米、1993)。研究代表者らは、看護師に対して、高齢難聴患者の適応的な対処行動を支援できるよう難聴とのコミュニケーションに関する知識獲得のための研修の機会は重要であることを考察した (森田ほか、2017)。以上のような研究の背景、超高齢社会の更なる進展などをふまえ、高齢難聴患者の適応的な対処行動の支援、看護の質の向上のため、高齢入院患者と看護師に対する研修の開発は重要であると考えた。しかし、日本において、公的機関・民間による難聴者への対応に関する研修制度は見あたらない。また、医療職者や難聴高齢者等に対する難聴およびコミュニケーションの理解と対応に関する研修の効果は明らかにされていない。本研究の意義として、研修の開発およびこの研修の効果を明らかにすることにより、看護職者を含む医療・福祉従事者の対応の質の向上に貢献できること、また高齢者の医療満足度の向上に繋がるものと考えた。

2. 研究の目的

研究開始当初の研究目的は、高齢入院患者と看護師に対する「高齢者の難聴と耳の健康、コミュニケーション」に関する研修の開発、研修会の効果を明らかにすることとした。

しかし 2020 年初頭より、新型コロナウイルス (COVID-19) が確認され、その後も蔓延化と感染拡大を繰り返し、研究活動は多大なる制限を受けた。当初予定していた研究協力者 (病院職員) は患者および職員の生命を守ることを最優先する状況にあり、なおかつ研究代表者・分担者は感染リスクの高い高齢者との接触は不可能となった。このため、患者への教育については断念し、積極的に職員の難聴者への対応について検討し、なおかつオンライン会議を導入・活用している病院を対象者を変更した。また、研究目的を修正し、「加齢性難聴に関する理解と対応」に関する研修プログラムを作成し、医療・福祉等に従事する職員に対する研修が意識や行動に及ぼす影響を明らかにすることとした。

3. 研究の方法

難聴者への補聴器の公的支援などの聴覚障害者に対する政策を充実させているデンマーク、オーストラリアを視察し得た知見、および国内外の文献により、「難聴者へのコミュニケーションの工夫尺度」(以下、尺度)を作成する。次に「加齢性難聴の理解と対応」をテーマに 4 回の研修会を企画する。

公益社団法人石川勤労者医療協会の医療、介護・福祉の 13 事業所に勤務する者で 4 回 1 シリーズとして実施する研修会「加齢性難聴の理解と対応」を受講し、調査協力に同意をした職員を調査対象とする。調査内容は、研修事前・事後アンケートと毎回の研修会終了後のレポートを予定する。いずれも Google Form を用い、事前アンケートは、難聴高齢患者への対応で困ること、研修で学びたいことを自由記述で回答を求めた。事前・事後の「難聴者へのコミュニケーションの工夫尺度」22 項目についても回答を得る。調査は匿名で実施したが、事前アンケートと事後アンケートとを対応させて分析を行うため、任意の識別コードを作成し記入を求めた。事後アンケートでは、尺度および研修会での意識や行動の変化を自由記述で求める。気づいたことや効果

的なコミュニケーションの実践などがあれば、次回までの間に報告をしてもらうこととした。
 【倫理的配慮】本調査は、「疫学研究に関する倫理指針」を遵守し、公益社団法人石川勤労者医療協会城北病院の研究倫理審査委員会の承認（承認番号 177）を得た上で実施した。

4. 研究成果

聴覚障害者に対する政策などが充実しているオーストラリア、デンマークを視察し、得た知見を日本応用老年学会に報告した。Hearing Australia は、政府資金による聞こえのサービスを行うオーストラリア最大のプロバイダーであり、ヒアリング・センターの国内ネットワークを通じ、オーストラリア政府の Hearing Services program による聞こえの健康サービスが提供されていることを報告した。また、新生児の難聴スクリーニング、補聴器購入の公的補助など聴覚障害に対する制度などが整えられているデンマークを視察した。その際、高齢者の自主的組織（NPO エルドラセイエン）のフレデンスボー支部では、難聴者とのコミュニケーションを行う際の9つの留意すべきこと、補聴器ボランティアが難聴高齢者に提供できることをリーフレットとして配布していることを学会誌に投稿し社会に発信した。特に、難聴者とのコミュニケーションにおける9つの留意点の中には、日本では強調されていない顔（口元）に光や照明を当てることを意識することが述べられていた。

上記の知見と国内外の文献を参考に、22項目の尺度を作成し、4件法「常にしていた」、「ときどきしていた」、「あまりしていなかった」、「全くしていなかった」とした。

研修会は、公益社団法人石川勤労者医療協会の13事業所に勤務する医師、看護師、薬剤師、ケースワーカー、事務職などを対象とし、研究代表者・研究分担者らが各回を分担し、表1のような内容で2022年に実施した。

表1 研修会プログラム

項目	開催日	内容
第1回 加齢性難聴の理解	7/14	1) コミュニケーションと難聴 2) 難聴の分類 3) 加齢性難聴の特徴 4) 難聴の有病率 5) 難聴に関する研究成果 6) 聴覚機能の検査
第2回 難聴者への支援制度と補聴器	7/28	1) 補聴器の進歩 2) 補聴器使用者のよくあるトラブル 3) 補聴器の購入
第3回 医療現場での難聴患者への対応 よりよいコミュニケーションをめざして	8/4	1) コミュニケーションの要素 2) 高齢者の聞こえと心理 3) 環境を整える 4) 皆さんのコミュニケーションを考えてみましょう 5) コミュニケーションの工夫 6) やさしい日本語
第4回 医療現場での難聴患者への対応 よりきめ細やかな対応のために	8/18	1) 当事者団体の調査にみる難聴者の受療時の困難 2) 高齢者に対応する病院・病棟看護師への調査からみえた課題 3) 入院中の難聴高齢者の困難さと医療者への期待 4) 海外トピックス - 補聴器ボランティア(デンマーク)

2022年7月より、事前アンケートおよびオンラインによる第1回研修会を開始したが、COVID-19の感染拡大第7波の影響を受け、職員らの感染などにより、研修会をオンデマンド方式に変更せざるをえない状況となった。また、感染拡大が続いた影響によると考えられるが、予測よりも動画再生回数、アンケート回収ともに表2のとおり十分な回答数が得られない結果となった。

表2 研修会の動画再生回数・アンケート回収結果

	開催日	動画再生回数	アンケート回収数
事前アンケート			49
第1回 加齢性難聴の理解	7/14	134	9
第2回 難聴者への支援制度と補聴器	7/28	97	4
第3回 医療現場での難聴患者への対応	8/4	79	4
第4回 医療現場での難聴患者への対応	8/18	55	-
事後アンケート			14

事前アンケートでは49名の回答が得られていたが、尺度の事前・事後に対応した回答数は11名であり、十分な解析が行える回答を最終的に得ることができなかった。11名の平均値から、研修の効果として研修尺度の22項目中4項目「大きな声で話しましたか」、「声は自然な大きさを話しましたか」、「離れ過ぎず、近づきすぎず適切な距離をとりましたか」、「自身の顔が影にならないように、光があたるようにしていましたか」については行動が変化している傾向があることを確認し、また自由記述の結果からも研修会は職員の難聴者対応能力の向上に寄与できる可能性があると推察された。

表3 研修会の事前・事後の尺度変化

	事前 (N=11)		事後 (N=11)	
	平均	SD	平均	SD
1 短い文章で話しましたか。	3.18	0.94	3.45	0.50
2 はっきりと話しましたか。	3.73	0.45	3.55	0.50
3 大きな声で話しましたか。	3.45	0.66	3.00	0.60
4 静かな環境へ移動しましたか。	2.18	0.83	2.00	0.74
5 口元が見えるようにマスクを外しましたか。(フェイスシールドをつける)	1.09	0.29	1.18	0.39
6 平易な単語を使用しましたか。	3.45	0.99	3.09	0.67
7 相手がわからないときは書きましたか。	3.00	0.74	2.91	0.79
8 相手がわからないときは言い換えましたか。	3.45	0.50	3.36	0.64
9 相手のほうを見て(相手に顔を向けて)話しましたか。	3.73	0.62	3.64	0.48
10 ジェスチャーを使用しましたか。	3.18	0.57	3.09	0.67
11 相手が話を理解しているかどうか確認をしましたか。	3.27	0.62	3.09	0.67
12 話のトピックが変わるときは伝えましたか。	2.55	0.78	2.18	0.72
13 ゆっくりと話しましたか。	3.91	0.29	3.64	0.48
14 叫ばないようにしましたか。	3.36	0.64	3.45	0.66
15 話を始める前に、相手の注意をひきましたか。	3.45	0.66	3.18	0.72

16 複数で対応する場合、誰が話をするのかを伝えましたか。	1.82	0.57	2.00	0.74
17 声は自然な大きさと話しましたか。	2.91	0.90	3.27	0.75
18 相手が答えるために十分な時間をとりましたか。	3.00	0.85	3.00	0.60
19 離れ過ぎず、近づきすぎず適切な距離をとりましたか。	2.55	0.66	3.00	0.74
20 相手が聞き取りやすいように配慮をしていましたか (例えば、聞こえやすい方の耳に向かって話すなど)	3.64	0.48	3.82	0.39
21 抑揚をつけましたか。	2.91	1.00	2.73	0.86
22 自身の顔が影にならないように、光があたるようにしていましたか。	1.73	0.45	2.73	0.86

今後、COVID-19 が感染症法上 2 類から 5 類に変更され、研究環境は整うものと考えられ、対象者を増やし研修会を開催し、尺度の検証を繰り返すことを今後の課題としたい。なお、この成果に関する詳細については、2023 年度に学会発表などを行い、本研修が医療・福祉に従事する職員の難聴者対応能力の向上に及ぼす影響について社会に発信する予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 佐野智子・森田恵子・杉崎きみの	4. 巻 15(1)
2. 論文標題 日本における難聴者支援の課題ーオーストラリアの難聴者支援システムの紹介と産官学民連携の重要性	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本応用学	6. 最初と最後の頁 86 - 96
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐野智子・森田恵子・奥山陽子・伊藤直子・長田久雄	4. 巻 65(6)
2. 論文標題 加齢性難聴の早期発見に向けた指こすり・指タップ音聴取検査の妥当性の検討	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本公衆衛生雑誌	6. 最初と最後の頁 288-299
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森田恵子・佐野智子・杉崎きみの・伊藤直子・奥山陽子	4. 巻 16(1)
2. 論文標題 デンマークの高齢者に対する難聴 対策と日本の課題ー聴こえのボランティアによる高齢者ピアサポートの重要性	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本応用老年学会	6. 最初と最後の頁 119-127
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 佐野 智子・勝谷 紀子・森田 恵子
2. 発表標題 全国自治体における高齢者の難聴対策に関する実態調査
3. 学会等名 第79回日本公衆衛生学会総会2020
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 佐野 智子・森田 恵子
2. 発表標題 日本における難聴者への社会的サポートの課題：オーストラリアと比較して
3. 学会等名 第15回日本応用老年学会大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 森田 恵子
2. 発表標題 デンマークにおける難聴の研究・福祉の現状と日本の課題-研究施設の視察・難聴高齢者へのインタビュー結果から
3. 学会等名 第14回日本応用老年学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 森田 恵子
2. 発表標題 高齢者の聴力機能の低下を踏ふまえたコミュニケーション
3. 学会等名 日本老年看護学会第24回学術集会教育講演（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 森田 恵子
2. 発表標題 デンマークにおける難聴の研究・福祉の現状と日本の課題-研究施設の視察・難聴高齢者へのインタビュー結果から
3. 学会等名 デンマントグループ記者発表会基調講演（招待講演）
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	伊藤 直子 (ITO Naoko) (10448623)	大東文化大学・スポーツ健康科学部・准教授 (32636)	
研究分担者	佐野 智子 (SANO Tomoko) (50348455)	城西国際大学・福祉総合学部・教授 (32519)	
研究分担者	長田 久雄 (OSADA Hisao) (60150877)	桜美林大学・大学院 老年学研究科・教授 (32605)	
研究分担者	渡辺 修一郎 (WATANABE Shuichiro) (20230964)	桜美林大学・健康福祉学群・教授 (32605)	
研究分担者	奥山 陽子 (OKUYAMA Yoko) (70817882)	日本医療科学大学・保健医療学部・講師 (32427)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------